

## 真贋論争

20世紀初めに発見された女性の肖像画が、レオナルド・ダ・ビンチが描いた「第2のモナリザ」だったとの鑑定結果が発表され、世界的な話題となると共に、新たな真贋論争が起こっています（10月4日付読売新聞から）。



（注：左はルーブルの「モナリザ」右は「第2のモナリザ」。PuzzPics から転用しました。）

「第2のモナリザ」の鑑定を行ったのは、スイスにある財団「モナリザ基金」ですが、そもそもこの財団は、「第2のモナリザ」の鑑定を目的に2010年に創設されたものです。

巨匠ダ・ビンチが描いた「モナリザ」は、多くの人々を魅了してやみませんが、その一番の理由は、「モナリザ」の神秘的ともいえる微妙な笑顔にあるといえるでしょう。

私は、かつてルーブル美術館を訪れた際、静寂な部屋にほのかに浮かぶ「モナリザ」を見て、思わずゾクゾクとした事を思い出します。ダ・ビンチの手は、神の手ではないかと思わずにはいらませんでした。

今回、「モナリザ基金」から本物とされた「第2のモナリザ」は、「モナリザ」のモデルとなった女性の、10年程前の姿を描いたとされるものですが、この絵が発見されて以降、何十年にもわたって真贋を巡り研究が続けられて来ました。そして今回、「モナリザ基金」が本物と発表したのですが、それによって真贋論争に決着が

つくどころか、むしろ真贋を巡って新たな論争に火が着いた格好です。

「モナリザ」には様々な謎が有りますがモデルが誰かというのもその一つです。

正直、「モナリザ」は、驚くほどの美女とはいえませんが、10年前の「モナリザ」はすっきりした顔立ちで、なかなかの美女ではないかと思えます。

「モナリザ」と「第2のモナリザ」を比較すると、構図が同じ、着ているものも髪型も、手の組み方まで一緒ですので、「第2のモナリザ」に贋作の疑いが掛けられているのですが、もしもこれが贋作だとしたら、素晴らしい出来だというしかありません。

「モナリザ基金」が、「第2のモナリザ」を本物とした理由は、デジタル技術でルーブル美術館の「モナリザ」の顔を11～12歳若返らせると、「第2のモナリザ」と一致したこと、ダ・ビンチは主に左手で描いたといわれますが、「第2のモナリザ」には左利きの特徴が確認されること等々としています(10月4日付読売新聞から)。

素人目の私には、何とも判断がつかい兼ねますが、専門家の皆さんが最新の技術を駆使してなお真贋がはっきりしないというのは、不思議な事です。

「モナリザ基金」が発表したように、「第2のモナリザ」が本物なら世紀の大発見という事になるのでしょうかけれど、ここまで見分けがつかないなら、専門家からはお叱りを受けそうですが、真贋どちらでも良いような気がします。

もしも「第2のモナリザ」が贋作だとしたならば、これを描いた画家は多分、草葉の陰で「してやったり！」と喜んでいるのではないのでしょうか。

(塾頭：吉田 洋一)